
Lyrical chaos the world ~ **世界を越えた決戦** ~

監視者・クリエイター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L y r i c a l c h a o s t h e w o r l d 世界を越えた決戦

【Nコード】

N 0 2 7 6 K

【作者名】

監視者・クリエイター

【あらすじ】

機動六課設立から3周年。そこではささやかながらパーティが行われていた。その時次元震が起きる。

狂った最凶の戦闘機人。

凛々しい剣を持つ者達。

神出鬼没な剣豪。

影を背負い生きていく人達。

留まらず流れの中で生きていく者達。

そして、物語は終わることなく、永遠に流れ続ける。そう、全ての始まりはここからだった。

L y r i c a l c h a o s t h e w o r l d
〈世界を越えた決戦〉

始まります。

この小説は、二階堂さん、東吾さん、銀吟さん、クロックさん、godaccielさん、そして、私ZEROの協力のもとで書いているクロスリレー小説です。涙あり、笑いあり、バトルあり、カオスありのこの小説。思うがままに楽しんでください

ブレイブフォース

「と言うより、涙…有りますか？」

有るの！と言う訳で始まります

Chapter 1 - はじまりの日 - (前書き)

それでは！クロスリレーのスタートです！初めはこのクロスリレーのしゅしゃいしゅさんの俺、NEROからです どうぞ

Chapter 1 - はじまりの日 -

今日、機動六課では、設立から3周年を迎え、隊員全員を集め、ささやかながらパーティが行われようとしていた。はやては壇上に上がる。今の彼女はホテル・アグスタで着ていた、水色のドレスを身に纏っている。

「機動六課、成立二周年を記念して…乾杯！」

《乾杯！！》

彼女のその音頭によって、乾杯をし食事などが始まる。

「お疲れ様。はやて。」

壇上から降りてきた彼女にゼロは話しかける。

4

「おおきにな。はあく。やっぱしみんなで騒ぐのは楽しいなあ」

「騒ぎすぎて明日仕事ができなくなるなよ？」

「う。それだけは言いつこ無しやよ、ゼロ。」

「なははは。冗談だって、冗談。」

「ゼロの冗談はあまり冗談として受け入れない方がいいかもね。」

そんな時、黒いドレスをまとった女性がこちらに来て、声を掛ける。

「それだけは言いつこ無しだぜ？フェイト。」

ゼロはその女性、フェイトに言う。

「だって、毎回、無理しないとは言ってるけど、無理してるでしょ

「？」

「うぐ…はあ。もう言い逃れはできないんだな。俺。」

ゼロは言い返すことができず落胆。それを見た二人は笑う。

「で、なのははどうした？」

ゼロはなのはの姿がこの場にはない事に気になって、フェイトに聞く。

「なのははアルスと居るし、リタはエミルと一緒に。」

「成程な。じゃあ、俺等は俺等で楽しめますか。」

「それもそうやな。」

と、ゼロ達は三人で楽しむことにした。

「色々有ったよな、一緒にいてから…12年間くらいか。」

ゼロが外を見ながら言う。

「そうだよな。私達が出会って、結婚して…。」

「エミル君達が来て…、邪神を倒したりなあ。」

「そうだな。大変だったけど、やっぱりここは俺等の居場所だな。」

「そうだね。私にとってはゼロが私の居場所みたいところもあるけど。」

「私もや。」

二人はそう言うと、腕に抱き付く。

「それなのに無茶して体壊してたら情けないな。俺。」

ゼロは二人に向き直り、苦笑いで言う。

「そうやけど、それがゼロらしさなんやよ。」

「だから、死なない程度にね？」

「意識不明になる時点で、お前等は涙ポロポロだろ。」

「……。」

ゼロがそう言った途端に二人は視線をそらし、顔を赤めらせる。

「でも、ありがとな。」

そう笑顔で言い、二人を抱き締める。

「意外と大胆やな。／＼／」

「確かに。／＼／」

「おっと、ごめん。」

ゼロはそう言って離れると、フェイト達は少しだけ寂しげな顔をする。

「お前等はくっついていたいのか、それとも、離れて普通に会話したいのか、良く解らんぞ。」

「どっちもや。」

・叩・

はやてがそう言った途端に、ゼロはデコピンをした。

「ぶざけるな。」

「ぶざけてないのに……。」

「十分おふざけだろうが。」

ゼロがそう言った途端に、大きな揺れが皆を襲う。ゼロはそれでも立っていたが、他の皆は倒れ込むほどの揺れ。さらに閃光が辺り一面を駆け巡った。

「次元震…。規模が大きいな…。」

ゼロがそう呟く。その後、ISを発動し、距離などの情報を集める。

「距離は…そう遠くはないな。規模は…中の下。範囲は…結構広いな。どうする?」

「行くに決まってるやろ。」

「…酔った?」

「そのボケはいらんから!速く行って…。」

「だんだん弱気になるなよ。まあ、いいや。酔いに当てられた奴は休ませた方がいいな。うし。行ってくる。」

「行ってらっしゃい…。」

「行ってきます。」

ゼロはそう言うと、六課を出て、次元震震源地へと急いだ。

今回の担当

・ゼロ ・フェイト ・リタ
・はやて ・エミル ・アルス

ゼロ

「さて、ここで初っ端から質問が。」

アルス

「奇遇だな。俺もだ。」

はやて

「私もや。」

リタ

「私とエミルもね。」

一同

「なぜここにこのコーナーが有るっ!」

まあ、そこは chaos the worldだからという事で。

フエイト

「そう言う事にしておこう?ね?」

ゼロ

「作者ざっけんなよ!?俺ら今回千字ちよつとしか活躍できてネエ

よ!」

リタ

「私らなんて、声すら出てない!」

落ち着け!今回は筋書きだけだから!大丈夫、次から出てくるから!

はやて

「まあ、そう言う事だから、落ちつこな?な?」

ゼロ

「まあ、良いが。何これ?」

—

— 作者ZEROから

—

— ども ZEROです クロスリレーが始まりました このように

Chapter 1 はじまりの日・・・(後書き)

という事で、次回は二階堂さん、お願いします

Chapter・2 騎士王との再会(前書き)

二番手、二階堂、行きます

Chapter・2 騎士王との再会

……ここは？

染められた銀髪がなびき、その青年は頭を振って半麻痺状態の脳を活性化させる。

「ミッド……なのか」

青年は自分の傍らにあったネックレスを首に提げ、ようやく覚醒した意識で辺りを見回す。確かにミッドチルダの首都、クラナガンの町並みが見えたが、距離はなかなか遠い。

「こちらブレイズ2……ダメだ、通信が繋がらない」

そのとき、彼の眼前に見慣れた黒い影が現れる。

「ガアッ！」

「シャドウ……。ちょうどいい、何がなんだか分からなくて苛ついてんだ。精々楽しませてもらうぞ！ エクス！」

『All right』

青年は首に提げていたネックレスを千切り、そのトップを目の前に突き出し、始動の言葉を口にする。

「セット……アップ！」

『Stand by ready・Set up.』

金色の魔力光が彼を包み、一瞬にして青年はシグナムに似た黒いバリアジャケットを纏う。

「行くぞ！」

『You make up one's mind?』

銀の閃光が黒い影に迫り、相棒の大剣を振りかぶる！

「騎焰十刃、一之刃、疾劫！」

影を縦に裂き、横の一閃で瞬く間に塵に返す。彼の技量を測るには充分過ぎる結果だった。

「……ふう」

バリアジャケットを解除し、青年は首に掛けているネックレスを指で触れる。

「エクス、みんなの魔力は感じるか？」

『Could you wait for a few time?』

「ああ、頼む」

「それ、俺も手伝おうか？」

青年が己の相棒に探索を任せ、ミッドチルダの月を見上げようとしたりするとき、背後に気配を感じ、すぐに聞き覚えのある声 that 彼の耳に入った。

「その声は……」

青年、神藤昶は少しの驚愕を混ぜた声を上げ、そこにいる男の名を口にする。

「ゼロ！」

「よう、昶」

ゼロはなんとも軽い調子で挨拶を交わした。

「ただいま」

「あれ？随分早いお帰りやな？」

ゼロは昶を連れてパーティー会場に戻り、はやては次元震が発生したというのにかなり早く帰ってきたゼロを不思議に思う。

「いやな、なかなか会えない奴と会ったもんだから」

「……ども」

並行世界のはやて達に出会い、何故かぶつきらぼうな挨拶をする昶。以前に似たような体験をしたからなのか不用意な発言をしないように気をつけているらしい。

「おい昶、挨拶はちゃんとしろよ」

「あ、ああ……。神藤昶、並行世界の機動六課に在籍する囑託魔導師です」

どこか遠慮がちな表情で、ぎこちなくはやてに礼をする昶を見た彼女は「可愛い人や!」と思ったが、すぐにいつもの調子を取り戻す。

「俺は今から千華達がいなか探すから、お前ははやて達と話してな。見たところだいぶ腹ぺこだろ?」

「すまない……」

「いっていいって てか、話し方変えたか?」

昶達の世界での話し方とはまるで違う彼の話し方に少し疑問を抱いたぜ口は直球で昶にそれをぶつける。

「いや、なんかいつもの話し方していいんかな、って思ってさ」

「そんなら心配ないだろ、はやて、そいつはそいつの世界でお前達の後輩だったんだ。後はよろしく」

「ん、任せとき」

ゼロはそう言ったはやてに微笑み、手慣れた手つきでコンソールを
弄り始めた。

「パーティーの途中でしたのに、すいません……」

「やっぱり大勢で騒ぐのが一番やし、気にせんでええよ」

「ありがとう、はやて先輩……あ、すいません。うちで貴女に言う
時に使う呼び方をしてしまった」

「先輩……。なかなかええ響きや 神藤君、ここにおける間は私らの
事を先輩って呼んでも構わへんよ」

はやての言葉にキョトンとした昶だが、すぐに人懐っこい笑みを浮
かべ、「ありがとうございます、はやて先輩」と深く礼しながらそ
う言った。

「そういえば、神藤君は何でここにやって来たん？ゼロみたいな副
作用付きの技でもあるんか？」

はやての質問に首を傾げ、しばらく考えた昶はぼつりと呟く。

「……分かりません。俺達がロストロギアの探索にをしていたら次
元震が起きて……気がついたらこの世界のクラナガンの外れにいた
ので」

「んー、ロストロギア関連の次元震かな？」

『たぶんそうではないかと』

不意に凜とした女性の声が聞こえ、はやては驚いて周囲を見渡す。しかし、彼女達のすぐ近くにはそんな声を出す人物はいない。

「アルトリア、居たなら返事しろよ。おし、待機状態解除」

昶がそう言うのと耳につけていたピアスが光り、身長30cmくらいの女性が現れた。

『すみません、昶。先程意識を覚醒させたものですから。』

女性、アルトリアは謝罪の意味を込めて昶に向かって頭を下げ、それを昶が指で無理矢理いつもの位置に戻した。

「あのなあ、俺は別に怒ってねーよ?」

『しかし、貴方の従者として……』

「その発言は禁止だ。従者よりも相棒に、って前に言っただろ?」

『そうでしたね』

「ユニゾンデバイス、やな?」

『はい。昶の従者にして相棒、アルトリアと申します』

「かしこまらんでええよ そや、エミル!リタ!ちよっここっち来てくれるか?」

はやての呼び掛けに応じたのは二人の男女。金髪の少年、エミル・ローウエルと頭にゴーグルを乗せた茶髪の少女、リタ・ローウエル

の二人だ。

「並行世界からのお客さんや」

「神藤昶だ、よろしく」

「リタ・ローウェルよ」

「……エミル・ローウェル」

昶はリタ、嫌がるエミルと握手し、自分が着ていた機動六課の制服の上着のボタンを外しそれを脱ぐ。何があつたのかは分からないが、彼の上着は裾がボロボロで、右の袖は完全に吹き飛んでいた。

「うわ、すごい事になってる」

「衝撃で消し飛んだって感じか……。次元震に巻き込まれた時のもんか？」

アリシア姉も虚数空間から引つ張り出された時に服がズタボロになつてたつつてたっけ。

昶は以前自分の義理の姉、アリシア・S・テスタロッサから聞いた話を思い出し苦笑する。

「何笑つてんだ？」

「いや、二人いる俺の姉の片方が言つてた事思い出してな。虚数空間から引つ張り出された人なんだけど」

「虚数空間から！？あなたのお姉さん何者よ！」

「魔導師だよ。まあ、普通の魔導師じゃねーけど」

まさかアリシア姉が一度死んだ魔導師だとは言えないし、な。

「昶、見つけたぜ！」

コンソールを弄り、幾つものモニターを展開していたゼロからの声を聞いた昶は反射的に彼の側に走ってきた。

「マジか！で、千華は！？みんなは！？」

「落ち着け。キャッチできた反応は千華、シン、リセの三人と……」

そこでゼロは急に口ごもった。昶はその意味にあまり気付かない。

「どっしたんだよ？」

「千華の側に一人、魔力反応がある。それに俺達はこの魔力反応を知っている」

「誰の魔力……え？これって……」

そこには魔力反応と共にミッドチルダの文字でこう書かれていた。

KUSANAGI KAKERU

「翔、先輩……？」

「いよいよ面倒くさくなってきたな……」

彼らは知らない。これが、今回の事件の序章に過ぎない事を……。

アキトーク

昶「は!？」

千華「なんでここでもやるのよ」

ほら、ZEROさんもやってたし、ノリ?

昶「ノリって……」

千華「で、ここで何するの?」

まあ通常版アキトークと変わらないかな。おさらいして、次に回す人発表して。

昶「ゲストは?」

ここには誰も呼ばない……予定。

昶「なんじゃそりゃ」

千華「じゃあ今日のおさらい。いつもはあたし以外が言っただけ、今日は人数少ないんであたしが言っつわね」

千華「昶によそよそしい口調は似合わない」

昶「待てゴラァ！」

千華「何よ？事実でしょ？」

昶「確かにそうだけど……じゃねえ！もう少し、なんかねえの!？」

千華「ああ。序盤のシャドウ戦、カッコつけすぎ」

昶「お前は俺が嫌いなのか!？」

千華「んー、好きよ」

昶「あががががが」

壊れたな。

千華「それじゃあ次は……東吾さんをお願いするわね それじゃ、馬鹿が起きる前に絞めましょうか」

昶「俺を抜きで終わらすなあ！」

千華「ちっ。しぶとい。まあいいわ。それじゃ絞めるわよ。決意を胸に」

昶・千華「次なる空へ！」

Chapter 2 騎士王との再会（後書き）

というわけで、三番手は東吾さんにお任せします。それではっ

Chapter 3 - 迷い込んだ旅人 - (前書き)

三番手、東吾。

推して参ります!!

Chapter 3 - 迷い込んだ旅人 -

ゼロと昶が再会を果たしていた、ちょうどその頃…。
ミッド南部に広がる工業地帯では…。

「ここは…、ミッドチルダか」

『そのようです』

コートタイプの騎士服に身を包んだ一人の青年 草薙 翔は、愛機である騎士の剣 アロンダイトを相手に会話をしている。

「だけど、ここも恐らく…」

『並行世界、でしょうね』

「やっぱりそうだよな…」

パラレルポートの効果により、並行世界を転々とする破目になってしまった彼は、元の世界へと戻るべく、旅を続けていた。
そして今回辿り着いたこの世界も、自分のいた世界では無いと知り、軽くため息をつく。

「ま、言ってしまうえばいつもの事か。めげずに頑張ろう」

『その意気です』

が、落ち込んでいても仕方がないのはわかっているのです、すぐに復帰する。

「さて、まずはこの世界の事について調べなきゃな」

そう言うや、翔は北へ向けて移動を開始した。

順調に飛行を続ける事、十数分。

「ん？ 誰かいるな…」

工場地帯から数キロ程離れた広い空き地に、三人の人影を発見する。気になった翔は、速度を落とし、降下を始めた。

高度を下げ、段々とその姿がはっきり見え出すと、向こうもこちらに気付いたのか、三人のうちの一人が手をあげてこちらへと誘導する。

「翔さん、お久しぶりで〜す」

「やっぱりそうだ…。皆、久しぶり！！」

誘導を受け、三人の前へと降り立つと、再会を喜びあう。詳しい事を聞きたく、翔はこの世界の事について聞くも、三人も突然ここに飛ばされたのでわからないと答えるに止まる。

「そつか。千華ちゃん達もか…」

「ええ」

「三人がいるって事は…昶君も、ここに？」

「いえ、気がついた時には俺達三人しかいなくて…」

「なるほど…」

そこまで聞いて、翔は考える。

こういう時、昶ならどういった行動を取るだろうか、と。そして考え抜いた末に出た答えは

「よし。それじゃ、行くとしようか」

行動を起こす事だった。

「行くつて、どこへです？」

「決まってるさ。管理局にだよ」

人差し指をピツと立て、管理局のある方角を指差す。

「この世界の事は、この世界の局員に聞くのが一番、だろ？」

「まあ」

「確かに」

「そう、ですね」

「それじゃ、行くよ」

そして四人は一路、管理局を目指して動き出した。

局の上空に差し掛かると、入口付近に人だかりを見つけ、そのまま降下を始める。

「来たか」

人だかりの中の彼もまた、降下して来る翔達に気付き、駆け寄って来る。

「ゼロ、久し振りだな。昶君も」

「お久し振りつす、翔先輩」

「元気そうだな」

「まあな」

「昶！！」

「千華！！ それに皆も。無事か？」

「はい」

「この通り」

昶達も、互いの無事を確認し、安堵の息をつく。

「なあ、ゼロ君。その三人は昶君の知り合いやってのはわかるんやけど…この人は？」

それぞれ再会を喜んでいる時、はやてはゼロに質問をする。

「こいつは草薙 翔。並行世界の囑託魔導師にして、はやてのいとこだ」

「……はい？」

「えっと…ちなみに、どっちだったっけか？」

「ん？ ああ、えっと…俺の母さんの弟が、はやての親父さんだから…。俺とはやての関係を漢字で書くと“従兄妹”になる…はず」「はずって、お前。現役の大学生だろうに…」

「そう言うなって。いとこの定義って、結構ややこしくて理解するのは大変なんだよ…」

「まあ、確かに…。俺も完全には理解しきれてはいないからな…。って、どうした、はやて？」

後ろを振り返ると、はやてがフルフルと震えている。

「ああ…。後輩に続いて従兄さんまで出来るなんて…。私、もういつ死んでもええわ〜」

「…って、縁起でも無い事言うな!!!」

翔は気を具現化して作り上げたハリセンで。

ゼロは平手の裏打ちで、それぞれ同時にツッコミを入れる。

「いったあゝ…。でも、二人共ええツツコミや。どや、今度三人で漫才やらへん？」

「「また今度な」」

「つれないなあ…」

「ゼロ、また新たな反応が出てるぞ」

そんな三人の漫才をよそに、昶は先程までゼロが見ていたモニターを指差し、こちらへ手招きしている。

「どれどれ…。東と西、合わせて9人。だけど、さっきと違って今度は名前が表示されてないな…」

「さっきって言うとな…もしかして俺達か？」

「ああ。さて、どうしたもんか…」

ゼロは腕組みをしながら、額に手をやり考える。

「よし、俺が東エリアの方へ行く。この六つの反応、どうも気になるんだ…」

「あ、俺も行きます」

「わかった。ほな、東の方は従兄さんと昶君に任せるとして、問題は西の方をどうするかやな…」

「よし、そっちは俺が行く」

「ゼロ、一人で大丈夫か？」

「昶君、ゼロなら大丈夫。そうだろ？」

「当然だ」

「それじゃ」

「またここで」

そして三人は頷き合うと、それぞれ反応のあった地点へと向かい飛び立った。

・プレシア邸のティータイム・

翔

「そして、他の皆さんの例に習い、ウチもやるワケね…」

アリ

「当たり前だよ」

リニ

「はてさて、この先一体どうなるんでしょうか…」

翔

「さあな。それは俺にもわからんし、当然誰にもわからんだろっさ

…」

リイ

「ところで翔。次の走者は誰にするんですか？」

翔

「ふむ、そうさねえ」

アリ

「あれ、おさらいと違ってやらないの？」

リニ

「あ、アリシア。そもそもウチではそういうのやってないですから

…」

アリ

「あ、それもそうだね」

翔

「よし。それじゃ、次は…」

アリ・リニ・リイ

「次は…？」

翔

「銀吟さんをお願いしようと思います それじゃ、see」

アリ

「You」

リニ

「Next」

リイ

「Stage」

全員

「バイバイ」

Chapter 3 - 迷い込んだ旅人 - (後書き)

はてさて、次は銀吟さん。
よろしくお願いします

Chapter・4 - 迷い夜叉(前書き)

四番手銀吟、とりあえず・・・遅れて申し訳ありませんでしたあ！

Chapter・4 - 迷い夜叉

ゼロと翔達が六課に戻ったころ

六課から西二十四キロメートル地点

「ぐっ、どこだここ、夜？つーかどこここ？」

ここにうつ伏せの状態から今ゆっくりと起き上がろうとしている青年が一人

「・・・なんだよマジで、なんでこんなところにいるか、意味不明、理解不能なんですけど」

そんな彼の名前は横河凌大、二つ名は伝説にもなっている白夜叉、F4の一人であり、大の甘党で優柔不断、日々怠惰な生活を送っているゲータラだ

「おい、なんで説明口調なのは知らねえけど、そろそろツッコむ(ぶっ殺す)ぞ」

・・・彼は独り言を言う変人でもあった

「・・・もうガン無視だな、それよりガーディこことこかわかるか？」

と凌大は4番手を無視し、自らのデバイス、ガーディアンソウルに今現在の自分がいる場所を尋ねる

「あ？なんかどっかの平行世界のミッドチルダみてえだな」

それにガーディアンソウルは答える

「・・・ミッドか・・・」

ガーディアンソウルの答えに凌大の顔が一瞬曇る

「・・・やっぱり管理局は・・・」

それにガーディアンソウルは途中まで言葉を発し

「ああ、なんの感慨も持てないクソ組織だよ、まあ俺の中でだけだけど」

途中で凌大が答える形となる

そして

「まあでも感慨が持てないのは“局”であって“局員”はわかかんねえんだけどな」

「知ってるよ」

凌大が言葉を繋ぎ、ガーディアンソウルが答える

「まあとりあえず動くか、ずっとここにいたって戻れるわけじゃないし」

「ガーディ、ここら周辺に人は？」

「ああ、二つある、ここから北に四キロと南西に二キロだ」

ガーディアンソウルは答え、凌大は

「じゃあ南西の方から行ってみるか」

と言って歩き出そうとする

「待った、西に結構いるぞ、んでその一つがこっち来てる」

ガーディアンソウルが凌大を止め、こちらに何かが来ている事を告げる

「・・・管理局か」

「たぶんな」

「西ってこっちか」

凌大はそう言って自身の右手を指差す

「そっち行くのか？」

「ああ、わざわざこっち来てくれてんだから俺も行ったが早いだよ」と凌大はガーディアンソウルの問いに答える

「へいへい、あっちは結構なスピードで飛んで来てるからたぶんお前も向かっていけば二・三分で会っただろうぜ」

「おう、サンキュー」

凌大は軽く答え、西へ向かって歩いていく

それからしばらく経って

「まだかよ」

「そろそろだ、向こうも気付いてるんだ、あっちから来るぞ」

「へいへい、ん？あれって」

凌大とガーディアンソウルが話していると上空に高速で飛行する人影を見かける

「ほら、すぐだったろうが」

「わかったわかった、悪かったよ」

そう凌大はガーディアンソウルに謝り、上空を飛行している人物に對して

「おい、ゼロー、ここに次元漂流者がいるからさっさと保護して
ー」

と図々しくも保護しろと言っただけ

それに気付いたのか飛行していた人物は凌大へと近づいてくる

「凌大……か？」

近づいてきた人物ゼロは驚いたような目で凌大を見たあと、頭を抑えながら軽いため息をつく

「そつだよ、残念ながら」

それを見た凌大はイヤミのごとくゼロに言い放つ

「いや違つんだ、実は……」

そう言っただけゼロは凌大に翔と昶達が先に来ている事を告げる

「……やっぱ俺帰るわ」

ゼロから事情を聞いた凌大は「じゃ、と手をヒョイと挙げて踵を返し、そのまま何処かへ歩いて行こうとする

「いやどこにだよ!？」

しかしゼロにツッコミと共に腕を掴まれそれを遮られる

「いやいやなんでだよ！？どうせまたなんかメンドくせー事あるんだろ！？もういいよ、かえるよ、還るよ土に！！！」

「かえるってそっちかよ！？いや、ちょっと待てい！！！」

凌大が言って事にゼロがツッコむ

「もういいよ、とりあえず六課に……」

そこで凌大は諦めたように言いながらゼロの腕を掴み、六課の方向へと歩き出そうとする

「いや……あと二人の保護も……」

しかしゼロも凌大の腕を掴み返し、生体反応があった方向へ歩き出そうとする

「いや、行かねえよ？」

しかしゼロの言葉に凌大は首を横に振る

「……どこまでもマイペースだな、お前」

それにゼロが呆れ半分に言うが

「生まれつきなんだからしょうがないだろ」

全くもってダメ人間である

「いや、別にしょうがなくねえよ、直せよ」

「いや、もうそんなんでもいいから取りあえず六課連れて行って!」

「そんなに早く行きたいなら一人で行けよ!」

「いや知り合いが居りゃいいけどさ、昶も翔も居ないんだろ!」

凌大はそう言うが

「千華達が居るだろ!」

とゼロが告げる

「だからだよ!!アイツぜってえ悪乗りするだろ!」

しかし凌大はある意味正論を言う

「ならついてこいよ!」

「いやお前が説明すりゃいいだろ!」

「だから他の二地点行かなきゃなんだよ!」

「あーもー!!わかったよ、千華達しか居ないんだつたら嫌な予感しかしねえし」

ゼロの言葉に渋々納得する凌大

「ならちつさと行くぞ」

そう言ってゼロは南西の反応があった方向へ向かって飛ぶ

「へいへい」

凌大はそう言ってゼロのあとを追う

管理局から東に三十三キロメートル地点

「なあ、なんで俺らこんな事になってんの？」

「知らねえよ、俺に聞くな」「つか、下の三人・・・大丈夫か？意識ないんですけど」

そこにはなぜか六人の男女が綺麗に山積みになっていた

上から三人、ナルシ、バカ、ブタは何故か意識があるようだが

凌・ひ・ヒ・弘「「「突撃！！となりの平行世界！！！！」」」

凌大「はい、というわけではじまりましたりリカ才版です」

ヒサ「いや、何故に？」

ひろ「他の作者さんがやってたからじゃね？」

弘輔「うちのは長いものに巻かれる生き方だからな」

ヒサ「ハア、で？ゲストは？」

凌大「いや呼べねえだろ？まだ」弘輔「だから今回は次の作者さんを告げるだけ」

ひろ「こんなに遅れちまったのにな」

ヒサ「じゃあさっさと見えよ」

凌大「へーい、それじゃ、次の作者さんはクロックさん、よろしく
お願いします」

Chapter・4 - 迷い夜叉(後書き)

ではクロツクさんよろしくお願いします

では

Chapter 5 ・ 度し難いな……変態。(前書き)

最初に一言……とてつもなく遅くなって申し訳ございません。

これから後続となる二人の作家様……そして参加している作家の皆様方ご迷惑をおかけしました。

Chapter 5 ・ 度し難いな……変態。

完璧なる晴天……とは言えずとも、限りない青空と見える。

そんな平凡なビル群からは、想像できないような……クレーター。そしてこの中心にいるのは、老け過ぎているわけでも、幼いわけでもない、況してや禿げてなんかいない男、バルト・シエルトだった。

「お疲れ様です……」

そんな声が彼がいるクレーターの外側から聞こえた気がした。

いや、実際に聞こえたのだ。

澄んだ少年の声……蒼髪の少年レン・クロフィールの声が……。

その声を聞いたバルトは、少しだけ溜息をつくと右後ろ斜め上……彼の方向を向き、一言だけ呟いた。

「……別に疲れてはいない」

その声を聞いたレンは、少しだけ含み笑いをすると、少女のような笑みを浮かべ、再度こう言った『お疲れさまです』と……そしてほとんど間をおかず続けてこう言った。

「模擬的とはいえ、実戦でそれを使っているのはすごいですよ……しかも規格外に調節を誤ったものですし……」

「お前……今何と言った!？」

レンの言葉を聞き、彼は少しだけ驚いていた。
そう彼が手に持つのは、レンが彼に頼まれ作っていたデバイス『シルバークロウ』の試作品である。

レンは、バルトの元にこれを持ってきたときに最初にこう言ったのだ……『ほぼ完璧に出来ました……まだ、バルトさんの実戦データが無いので、ちょっとだけ協力してください』と言う事を……。

バルトがレンに怒ろうとしたその時、彼は気づいた……。

「なあ、レン。ここはどこだ？」

そう、彼らがいるのは……元々彼らがいた場所である本局の訓練施設ではなく、ミッドチルダの街中である。

バルトにそう聞かれたレンは、どこって言われましても……と言いたそうな顔をして一言。

「正確な場所は分かりませんが……。おそらくはミッドのどこかでしょう」

レンはそう結論を出した。

それと同時に、彼が自らの手首に目を向けていた……だが、その目線の先には探している物の姿はなかった。

「あれ、シャドウ？」

（はい？ どうかしましたか……マスター）

聞こえたのは首の近く……。

彼の首にかかる十字架よりその声は発せられた……。

レンは、それを見るとある考えが浮かび……そして少しだけ溜息

をつき、こうボソツと呟いた。

「……また並行世界か」

「並行世界？」

レンが呟いた言葉を理解する事が出来ないバルト。

昔は賢かったはずなのに……とレンは考えると、これからどうするべきかを考える。

「どこに行くべきか……やはり地上本部へ行くべきか？」

南に見える地上本部を、少し目を細めてみながら考える……。そしてレンが呟くと、またバルトがレンの言葉に反応し。

「……俺に聞いているのか？」

そうバルトが聞くがレンが再度無視して、ぼんやりと空を見ながら考えた……。

どこに行こうか考えた……。

考えて、考えて、考えて……。思いついた!!

「そうだ!! 六課へ行こう!!」

「なんだ!! その自暴自棄と間違えそうな、どっかのキャッチコピーを真似たような台詞は……」

決して、京都へ行こう!! を真似た気はないのだが、言われてみればそうかもなと少し考えると、レンは歩き出した。

なぜか六課と真逆の方向である、北へ……。

数十分後……。

「レン……ここはどこだ？」

「森の奥……または、林の中です……」

歩き続けて、数十分。

なぜか彼らは森の奥にいた……。

遭難した簡単な要因は、言うまでもなくレンが、こっちです。と
まっすぐ機動六課と反対の方向へ、歩き出したのが原因である事である事なのだから

「レン……言いたい事はあるか」

「……ありません」

まあどんだけ言っても、過ぎた事は戻るわけないし……。と
バルトは一言でまとめると、ミッドチルダの地図を取りだした。

「えっと、ここが北側の森だから…… 反対にあるのか」

「真逆ですか……」

バルトの言葉を聞いて、少しだけレンがテンションを下げるが、
バルトは全く気にしないように歩きだした。

ほぼ同時刻……。

「おい、ここはどこだ？」

「それは私に聞かれても困るな？」

「久しぶりの出番だよお」

ミットチルダのとある場所……取りあえず町中から外れたような工場が多い場所。

そんなところに三人の男女はいた。

「エリオット〜お腹すいた〜」

「セシリア、なぜこのタイミングで俺に言うんだ？」

「じゃあジュリア、お腹すいた〜」

「あたしは何も持ってないわよ」

一人の少女は栗毛の少女、ジュリア・ローゼット。

一人の少年は銀髪の少年、エリオット・ラージエスト。

そして空腹緑髪のバカっ娘、セシリア・フローゼルである。

「お腹すいた〜!!」

「どうして俺はここにいるんだ？」

「取りあえずここに来る前、何をしていたかが思い出せないんだよね」

冷静の現状について考えるエリオットとジュリア……そして、自らの精神が訴える欲求を大きく声をあげて言うセシリア。

だがエリオットとジュリアは、全く気に留めず無視をする。

「とりあえず現状の確認と、これからの行動を考えよう」

「うん、それがいいと思う」

「お腹すいた〜!!」

エリオットは、今現状で考えられる無難な行動を決定しそれにジュリアが賛成したのだが、セシリアは相変わらず、どこかの大食い純白修道女のようなことを叫んでいた。

だが決して聞きとられる事はなかった。

「現状確認、怪我はないか？」

「うん無いよ」

「無いけど、お腹すいた〜」

「……………」

若干エリオットの顔が無表情で、ジュリアは顔を引きつかせる…

…。

そんな二人の反応を無視して、セシリアはもうそろそろバリエーションの無さに作者が苛立ち始めたこの台詞を言った。

「お腹すいた〜!!!!」

「……………(イラッ!!)」

もう言わなくても分かる通り、エリオットとジュリアは頭に少し筋を浮かべて、若干震えているように見える。

そしてセシリアがもう一度口を開けようとした瞬間……。

「お腹……………」

「……………」

完璧なタイミング、完璧に息のあった怒鳴り声は静かで何もなかった向上をに響いて木霊する。

そんな完璧な怒鳴り声を聞いてバカは、こう答えた……。

「お腹すいた〜って言ってるんだよ？」

堂々と言い張るセシリア……それを見たエリオットは、ああ……と納得するような台詞を言いながら全く納得していないムカついたような顔のまままでこう言った。

「すまなかった、俺はうるさいと言うべきでは無かったな……口を開くな!!」

その言葉を聞いてセシリアは、ムスツとエリオットとジュリアをジト目で見ていたが、空腹の影響もあってか、あまり怒って暴れる気はないようであった。

そして少し疲れたエリオットとジュリアは、ほぼ同じタイミングでほぼ同じ方向の空を見上げた……そこに見えたのは、草薙翔と神藤昶に二人であった……。

そして元の位置に戻って……。

「バルトさん……」

「……どうかしたのか？ レン」

二人は町といえば町……なのだが人の姿をほとんど見る事の出来ないいわゆる路地裏みたいな場所に来ていた。

だが少し前の文にまで戻って考えてほしい……彼らはこんな路地裏に来ていたわけではなく、あくまで目的地きょうりつかを目指していたはずである。

目指して目指して目指した結果がこれなのだが、どちらも方向音痴が分かったところで結局は解決にはなっていないのだが、二人は肩を落としながらも歩き続けていた。

それから数分、最早ミッドチルダの町を一直線に突っ切って……最早、最初に目印にした地上本部が北に見えている状態なのだが、この二人は全く気付いていない。

だが……そんなに道を知らない二人でも、歩いているとそのうちまともな道……普通の大通りには出られるものである。

「へん……バルトさん、何とかまともな道に出る事が出来まし
たね……」

「一瞬、へん……とか聞こえた気がするが、まあ……何とかな
たな」

決して事態の解決にもなっていない以前に、何をするかという目標さえ見失っている二人は、無駄に街を歩き回っているだけの何かに成り下がっていた。

まあ、成り下がろうが全く気にしない二人なのだから、成り下が
ろうが落ちぶれようが全く無視しそうだが……。

「それにして見ても、歩くという行動はダルイですね……」

「それは同感だ……結構歩いた気がするからな」

歩いている事が主題ではなく、どこかに行く事が目的だった気がする……とレンは少しだけ頭を回転させるが、かなりの距離を歩いた事と若干の水分不足が原因ですぐに思考の回転は停止する。

「バルトさん……何か飲めそうな物を探してきます……」

「おお、それなら俺も金を出すから買ってきてくれ」

そう言つて、端末を少し操作し、レンに飲み物代を渡すバルト……。

それを見てレンは……これってパシリ扱いじゃないか!? しかもバルトさんに……と考えたので、

「分かりました。二つ買って俺とシャドウで飲みます」

「それじゃあ買って、って何言つてんだ!!」

一瞬無意識のうちに返事をしたバルトは、自らが言った言葉に気付いてすぐさま取り消す言葉を言ったが、すでにレンの姿はなかった。

「レンの奴……なんて事を」

そんな言葉も誰も聞く相手がいないと寂しいものである。

そんなとき、途方に暮れていたバルトにそこら辺を通りかかった少し美人のお姉さんが来たのだがバルトは、とてつもないセクハラ発言をしたので……。

「フェザーランサー!!」

といった具合で空の彼方から制裁が飛んできたので……。

なぜか知らぬうちにあまりギャグではすまされない攻撃を喰らったバルトは、ギャグのように黒焦げになりながら……その方向を見ている。

「ありがとうございます。ゼロさん……」

「気にしないでいいぜ、フィール君」

どこで合流し……どこで結託したかわからないレンとゼロの二人は、空の上からバルトを見下ろしている。

彼らがどうやって合流したかは、説明を省略させていただくが……転移魔法を使ったレンの魔力を感知したゼロがレンを見つけただけなのだから……。

さてさて、合流した二人はかつてエリオットが悪ふざけで遊びまくったときと同じくらい……もしくはそれ以上の魔力を収束させながら……こう一言。

「「度し難いな……変態!」」

この後のバルトを見た物は……入るらしいから大丈夫だきつと……。

レン

「レン・クロフィールとその他四名のオールナイト全時空!」

その他

『その他四名!?!』

レン

「何となくね……だって全員の名前書くと一行超えるし……」

ジュリア

「その扱い話酷いわね」

セシリア

「特権を行使って、こう言つのを言うんだね」

レン

「セシリア……なんか違う」

エリオット

「特権行使：特別な権力をもった人間が、その効果を行使し自分の立ち位置を確立させること……だったかな？」

バルト

「まあ、そう言つてレンを苦しめるな」

全員（レンを除く）

「黙つてください、変態さん!?!」

バルト

「ゴブツ!! お前たち本編でレンが使つた、失笑ネタをこんな所で使うな!?!」

エリオット

「だが、今回の状況を見る限りでは……結果的に『変態さん』なのでは?」

ジュリア

「町を歩いてる女の人に、声をかける《変態さん》だしね」

セシリア

「【へんたいへんたいたいへんさん】?」

レン

「セシリア……「変態」が大変になつてるぞ」

セシリア

「大変な【へんたい】さん?」

レン

「度し難いな……いろんな意味で」

バルト

「レン、お前はかばってくれないのか……」

レン

「事実は隠蔽できない……それが世の中の常識ですから……」

バルト

「それは良いにしろ、これから俺は変態で通って行くのか？」

全員

「あんたは最初から変態だよー!!」

バルト

「——*?……!!」

レン

「バルトさん……標準語をお願いします」

バルト

「——*?……!!」

レン

「ああ……バルトさん言葉が死んでる……」

エリオット

「もう放送事故だろ、これは……」

レン

「ああ……今回の放送はここで終了したいと思います」

エリオット

「次の走者は、godaccell先生お願いします」

レン

「では本日の放送はこれまで……!!」

レン&エリオット

「またいつか……!!」

Chapter 5 ・ 度し難いな……変態。(後書き)

取りあえず……今度から速く出来るよう精進したいと思います。

Chapter・6 戦いの予感（前書き）

申し訳ありません、遅れてしまいました（汗）
次からは気をつけます…

では六番手 godaccell いきます
楽しんでいただければ幸いです

Chapter・6 戦いの予感

まったく、妹の頼みとはいえこんな“世界”に来るのは面倒でしたが……面白い人に出会えましたわね

女は街の中央を闊歩しながら、楽しそうに鼻歌を響かせる。

いきなり変態まがいな言葉をかけられた時はドキッとしましたが、やっぱり男性はあれくらい野獣の方が明確に上下関係が決定付けられて面白いでしょうね

“彼”はまったく靡かない人……というより自分から何かしようとは思わないでしたから……。

先ほど変態な話を私に振ってきた人は、何やらいろいろな魔法攻撃をくらって混沌してましたが、それがなければ骨の髄まで吸い尽くし……おほほ、何でもありませんわ

そんな事を考えながら歩く女に、妹から通信がくる。

「シルヴィお姉ちゃん？ 設置の方は進んでる？」

可愛い妹の声に女、シルヴィは大丈夫と返す。

「後三つか四つ程仕掛けたら戻りますよ お姉ちゃんを信頼しなさい 隠密行動はお姉ちゃんの得意分野何ですからね、イユちゃん」

イユはその返事に満足したのか、通信を閉じる。

シルヴィは大通りから脇に入り、人目に付かない場所で空間に“手を差し込む”。

手を抜いたシルヴィは、魔力を感じた誰かが猛スピードで近付いて来るのを察知して、自分の相棒を手に取る。

「かなりの強者…管理局員でしょうね。ラック、いけますか？」

《いけなくてもいくんだろ？ なら迎え撃つ》

相棒の頼りがいのある言葉に微笑を浮かべ、まだ見ぬ敵を夢想する。

風が吹いた。

目の前に立つのは三人と気絶した変態。

一人は不穏な魔力に油断を怠らない戦闘機人。

一人は不穏な魔力に興味を示し、担いでいた変態を横に捨てた魔導師。

一人は……「俺は関係ねえよ？ ちよつと友達に付いてきただけ、まあぶつちやけ本部に帰るよりは良かったけどな！ とりあえず俺はめんどいから頼んだぜ？ 俺はそこらへんで見物しとくわ！ だって眠いし！」というニュアンスを言外に漂わせた「かえる！ いや、還る！」という発言をし、止められている、しかし実力が窺える夜叉。

だが、三人…いや二人に関しては分かる。

私をここで捕まえてあれやこれや聞き出そうという雰囲気がある。

一名無関心に欠伸してるんですけど…無視します
やる事は変わらない。

「少しは相手しましょうか お姉さん、強い男は大好きよ」

《ほどほどにな…危なくなれば“強制廃棄”する》

その言葉にシルヴィはウツと怯むが、ほどほどに逃げることにして、ラックを構えた。

*

ハツとして男は目を覚ました。

上には二人分の重圧、目の前では三人の魔導師がコントのようなものを繰り広げているが無視。

ここはどこだ…？

記憶に障害が見られる。

自分の名前とデバイス名は思い浮かぶが、それ以外は底の開いたポケットのようだ。

とりあえず、三人に気付かれないように声を潜めて、デバイスに話し掛ける。

「セブンス…サタン、ベル、聞こえるなら小さく返事をしろ」

《聞こえているぞ、マスター流留》

「サタンか、ベル…ベルフェゴールはいるか？」

《いない、どこか別の場所に落ちたみたいだ》

「来てるんならいい」

現状わからない事だらけだ。

起きるのに上二人を除けるのも面倒と思った流留は目の前にいる三人に声をかける。

当たり前だが、見たことが無い顔だ。

「すいませーん」

少し間延びした声になったが気にしない。

その声に気付いたトリオの一人が、

「お？ 目が覚めたみたいだな、出られるか？」

残る二人はまだ漫才を続けているが、この際無視だ。

「いや、出来れば上二人を除けてくれると助かる」

「だが断つ…！」

「断るなよ！」

後ろの二人がいきなり入ってきて、あれやこれやと話している。

内容は「キャラが違う！」「それは俺の台詞だ！」「冗談はツツ

コミだけにしろ！」「駄目だ、死のう…」「等々の…最後の誰だよ！

？ 話が繰り返されている。

流留はそれをどうでも良さげに見ながら、どうでも良いことだけど、と呟き、

「とりあえず上二人をどけてくれ…」

そう思った。

しかし状況は混乱する一方にも関わらず、更に二人、乱入者が現れる！

「あれお前ら？」

確かに三人だけを目に止めて、騎士と旅人は混乱に乱入する。

「どうでもいいけど、上二人を…」

流留の助けはいつになるのか　！

*

「お姉ちゃんのおかげで結構楽に制圧出来るかな」

イユは“異世界”の中で、小さく微笑む。

その手には漆黒の孤高の館が描かれた銃剣。

足下には、どこかで見た事のある黒い影がうようよしている。

「あはは　はやく行きたいの？　シャドウ・レプリカ」

黒い影、シャドウ・レプリカは答えるように蠢きを増した。

イユはその顔である部分を撫でて、もう少しね、と宥める。

「黒い影が世界に浸食したとき、世界はカオスに移行する…後ちよ
つと」

イユは孤高の場所でただ笑う。

願わくは混沌を…

Flowing World

流留「堅っ！ 堅すぎる！ 後にく作者様の事考えてねえだろ！？」

……ごめんなさい、自分でもやりすぎたと思います（汗）
初めてのクロス…ちょっと浮かれていたのかも知れません（汗）

流留「馬鹿やろー!」

イユ「まあそのくらいにしといてあげなよ」

シルヴィ「そうですねよ、頑張って参加してる作者様の作品全部に目を通したそうですよ?」

流留「恥ずかしくてコメント出来ないとか幼児か、貴様!」

い、いやー…最初の一回目って肝心じゃん?

流留「さてと、今回振り返りますか」

スルー！？

イユ「そうだね」

シルヴィ「自分は戦闘を率先してみよう！とか調子に乗った事言
って実現させてるように見えて丸投げしてるわね…誰が拾うのかし
ら？」

グサツ！

流留「まったくバカはこれだから…」

グサグサツ！

イユ「ばーか」

グサツ！ どさっ…

流留「あ、やりすぎた？」

イユ「ほっとこ えっと…次の作者様は…」

シルヴィ「キラ様ですわね よろしく願います」

流留「バカの後は大変だが勘弁してやってくれ…次はもう少し柔ら
かく頑張るそうだから」

イユ「じゃ、これで終わるっか」

流留「そうだな、せーの」

全員「次の空にBatontouch!」

「追」

少しめちゃくちやな気がしますが…これでいいのでしょうか？
気を付けるところがあれば教えていただけると嬉しいのです
では

Chapter 6 戦いの予感（後書き）

次はキラ様です

めちやくちやな後ですが（汗

お願いします

Chapter 7 【装製の魔術師と狂戦士と英雄王】（前書き）

遅くなりました（俺にとっては）…すいませんでした！

むちゃくちゃになりましたが、どうか楽しんでもらえれば幸いです

Chapter 7 【装製の魔術師と狂戦士と英雄王】

地球・海鳴市にて、1つの結界が張られた。

その結界は魔法ではなく魔術による固有結界によるものだった。

固有結界の名称は『無限の装製』。無限の武器を内包する固有結

界。内包する武器は彼の英雄王が持つ無銘の剣『乖離剣エア』をも内包し、さらには拳銃やアサルトライフル、アニメで見かける剣や槍も内包されていた。

そして、固有結界の中心には赤い外套を纏い、褐色の肌とセミロングの白に限りなく近い銀髪が特徴的な少年

くさかへかける
草壁 駆と2

メートルは超える体格に岩でできた斧剣を軽々と振り回す駆の『使い魔』

サーヴァント

バーサーカー、真名ヘラクレスがいた。

「ヘラクレス、往くぞ」

「全力で来てください、主」

「わかった」

駆は近くに突き刺さっていた炎の魔剣の名を冠する宝具『害為す焰の魔杖』を抜き、ヘラクレスの斧剣と駆の『害為す焰の魔杖』の刀身がぶつかり合う。駆は数秒は耐えたが、力の差か、ヘラクレスに吹き飛ばされる。

「流石は狂戦士のクラスのサーヴァント。『害為す焰の魔杖』でも力じゃ負けるか」

すると駆は、『害為す焰の魔杖』を地面に突き刺す。

「トレース 投影、開始」

「憑依経験、共感終了」

「ロールアウト バレット クリア
工程完了。全投影、待機」

駆は空中にバーサーカーが死なない程度の威力を持つ低ランクの
宝具や剣を造り出す。

「フリーズアウト ソードバレルフルオープン
停止解凍、全投影連続層写……！！」

すると、駆が造り上げた無数の低ランクの宝具や剣は真っ直ぐへ
ラクレスへとその刃を放つ。

だが、ヘラクレスは手に持つ斧剣を盾代わりにして、駆が放った
無数の宝具や剣を防ぐ。すると、駆はある呪文を口にする。

「ブロックン・ファンタズム
壊れた幻想」

すると、ヘラクレスの斧剣に突き刺さっている無数の宝具が無尽
蔵に爆発を起こす。

その爆発は駆とヘラクレスを飲み込み、一瞬のうちに駆とヘラク
レスは『無限の装製』アンリミテッド・ウエポン・ワークス内から姿を消してしまった……。

「ここどこさ……？　つてか、ヘラクレスたちは？」
「一応令呪はあ
るし大丈夫だと思うが……」

「やっと目覚めたか駆よ」

「……姉さん？　何で霊体化れいたいしてるのさ」

「我にも分からぬ」

「そつか……」

今、駆と話している黒と黄色を貴重とした服を着ているポニーテールの女性　アーチャーは昔から家族のような関係の中で育つていたため、英霊の彼女を駆は姉と慕っている。ちなみに、アーチャーの真名は英雄王ギルガメツシュである。

ギルガメツシュ（以下、ギル）が言ったクー・フリーンとは魔槍
ゲイ・ボルグを所有する駆の英霊　ランサーのことである。

「あれ、アルトリアやヘラクレスたちは？」

「さっきから質問ばかりだな愚弟め……まあ良い。我のほかにクー・フリーンとヘラクレスがいるぞ」

「なら俺らがどこにいるのかは……分かるわけないか。……つて此処はミッドチルダなのかよ！　チツ、管理局絡みかもな……めんどくせエ……」

「仕方ないでしょう主。あんな大量の宝具……しかも宝石剣まで混ぜられていると並行世界、もしくは別の世界にいけるのも不思議ではありません」

「だよな……ヘラクレス、さっきの続きやるぞ。」
トリス、開
始

すると、駆はヘラクレスの宝具『射殺す百頭ナインライフス』とヘラクレスの斧
剣を投影する。

「
トリガー
投影、装填」

「
ナインライフス
駆は『射殺す百頭』と斧剣に魔術回路を通して魔力を送る。
そして、駆はヘラクレスのあらゆる急所に狙いを定め、

「
セッター
全工程投影完了」

「
ナインライフスブレイドワークス
是、射殺す百頭」

振り上げられた斧剣はヘラクレスの急所を切断しようとする。だが、ヘラクレスも負けてはおらず、斧剣で『是、射殺す百頭』を防ぐも、最後の一撃を防ぎきれなく、1度死んだ。

「
あー、すまんヘラクレス。1回殺しちゃった」

「
いえ、お気になさらず」

「
でも、ゴメンな。次はやり過ぎないように気をつけるよ」

「
ナインライフス
そう言って、駆は斧剣と『射殺す百頭』を無限の武器を内包する
『丘』に戻す。同時に、ヘラクレスを霊体に戻す。」

【後書き？ みたいなもの】

書くことが全く無い……それにしそうと思ってたランサーは出せなかったしギルガメッシュもあまり出せなかった……

と言っわけで、次はZEROさんかな？ よろしくお願いします。

Chapter 7 【装製の魔術師と狂戦士と英雄王】（後書き）

ついでにZEROさん、次は任せました！

Chapter・8 「大御所だな……」 (前書き)

少し遅れました。では、どうぞ

Chapter 8 「大御所だな……」

「また魔力反応か……」

「またかよ」

ゼロはそう呟き、その呟きを聞いた凌大が悪態つばくそう言う。

「我儘言うな。この変態の様になりたいか？」

ゼロはフィールが持っているバルトを指を差し、凌大は思いつきり沈み込む。それもそうだ。もう、ボロボロになっていたのだから。

「…スミマセンデシタ」

「ヘタレめ」

「何だとゴラアツ!!」

「まあまあ。二人とも落ち着いて」

そんな2人の喧嘩をフィールが抑える。

「ま……。フィールの言う通りだし。からかつのもやめるか」

その時、通信が入る。昶からだ。

「こちら、昶です。どうぞ」

「聞こえてる。どうぞ」

「何処の軍隊だよ……」

凌大がそんな事を呟いていたが、ゼロは全く気にせず、応答を聞く。

「セシリア、エリオット、ジュリアを確保。そちらは？」
「こつちは凌大とフィール。後、変態バルトという名の紳士を確保した。
確認したところ、後5人位はいる。どうぞ」
「了解。とりあえず…。あ」
「どうした？」

昶が何か言おうとしたところで、言葉を止めたため、ゼロは聞く。

「いや、なんか、5重の塔らしきものが…」

「なんだよ。それ」

「5重の塔って言うのはですね…」

「そう言う事じゃなくて」

昶が本気で説明しようとし始めたため、ゼロは止める。

「人間か？ それとも違う何かか？」

「人間です。それと…ユウがいます」

「何故に!？」

ゼロは昶からの驚愕の事実を聞かされ、かなり驚いてしまった。

「後、ナルシとバカと豚と流留がいます」

『誰がナルシノバカノブタだアアアア!』

「あ。そいつら俺のツレだわ」

「おいおい。動物はちゃんと世話しとけて」

『誰が動物じゃアアア!』

「それもそうだな。すまん」

「とりあえず、ユウと一緒に連れて帰ります」

「了解。任せた」

そう言うと、通信を切る。そして、変態バルトという名の紳士を担ぎ、歩き出すゼロ。

「何処行くんだ？」

凌大がそう聞く。ゼロはいたって簡潔に答える。

「決まってるだろ。六課に戻る。この変態も置いてこないと、そこにいる実力者にも勝てなくなってしまうからな」

ゼロはそう言い、先程、エリオットがナンパしていた女性を見る。

「あら？ ばれちゃったんだ」

「微弱ながら、殺気を感じる。何者だ？」

ゼロは厳しい目付きで見つめ、結界が張られ、女性は振り向きざまに魔力弾を放つ。

「フツ！」

ゼロが鋭い呼吸をすると同時に消えさる魔力弾。否、ゼロが手刀で切り裂いたのだ。後ろの二人も構えを固くする。

「ここまでされたら、もう何もできないね」

「ミッドにクーデターでも起こす気か？」

「ん〜。ちよつと違うかな？」

「何が目的だ？」

「色々…こつちにもやりたい事があるんだよね」

「なら、さっさと行け」

ゼロは右手を上げる。すると、砲身が具現化され、彼はそれを女性に向ける。

「これ以上続けるのなら、加減はしない」

「なら、ここは退散させて貰うかな」

そう言うと、煙幕弾を投げつけ、煙が晴れた頃にはもう消えていた。

「行ったか…。寝たふりしてんじゃねえぞ。バルト」

「俺は今寝ています…」

「フェザーランス」

「すみませんでした」

ゼロはそれを聞いた瞬間、ニヤリと笑い、上空に放り投げ、砲身を向けて…。

「人間Fire flower」

「ぎゃあああああああああああああああああああ！！」

『鬼………』

ドシャツと落ちるバルト。対してゼロは終始ニコニコ笑顔であった。

「ニコニコニコ動画ッ」

『それはいろんな意味で危ないっ！』

二人は盛大にツッコミを入れ、ゼロはそれを気にしない様に、バルトを担ぎ、六課へ戻った。

*

「おかえり〜」

「ただいま。はやく」

とりあえず、ゼロ達が着くと、昶と翔達も集合していた。

「お疲れ様」

「ああ。お疲れ様」

ゼロと昶は手を合わせる。その後、祐輔が口を開く。

「けど、ゼロにしては珍しいよね。一人残してくる」

「あゝ。違う違う。これから保護しに行くんだよ」

祐輔の言葉をあつさりと否定。

「あ？　じゃあ、つまり……」

「という事で、今此処にいる時点でのフラグキング。頼んだからな」

ゼロは昶の方を見て、言う。昶にもそれがわかった様で、額に青筋を浮かべる。

「誰がフラグキングだ」

「じゃあ、行ってくる」

「行つてらっしゃい」

昶が言い終わる前に、ゼロは飛び立ってしまった。

「あ！　待てっ！」

「待てっって言われて、待つ大バカ者はここには居りません」

ゼロはそう言い放ち、さっさと飛び去ってしまった。

*

「駆。何か来るぞ?」

「マジかよ…。めんどくせえ」

ギルがそう言うと、その方向を駆は見る。そこには、六課の制服を纏ったゼロがいた。駆は静かに、構える。

「いたいた。とりあえず、俺は管理局だ。次元震があつたから、周辺の捜査をしてるんだが……」

「俺からなんも話せることはねえ。さっさと行きな」

「話はちゃんと聞け。別に取って食う訳じゃない。ただよ。お前の保護をしに来ただけなんだよ」

「信じられネエな」

駆は疑惑の瞳でゼロを見る。そんな様子に嘆息し、頭をかく。

「まあ、ここで撃ち殺されるよりはましだぞ?」

「撃ち殺される?」

「あらら? ばれちゃった?」

「また会ったな。イユ」

ゼロはそちらを見ずに続ける。

「アイツ、銃剣構えてるぞ!? 良いのかよ! 管理局の魔導師!

!」

「五月蠅い。相手はこちらを撃つ気すらないんだから、放っておけ」

「撃つかもよ? 私」

えらく陽気にイユは言う。はっきり言って、ゼロは少し疲れ気味なので、手っ取り早く言う。

「撃つたら、加減なしで、撃ち返す」

「怖い怖い　まあ、ここで君を攻撃すると、シルヴィ姉ちゃん見なくなるから、やらないけど」

「幾ら俺でも、実弾兵器食らって平気じゃないぞ？」
「なら、試してみる？」

その時、後方から、リボルバーが動く音がした。ゼロは苦い顔をして、後を続ける。

「断る。第一、そんなに時間もない」

「ちえっ。面白そうだったのにな」
「分かったら早くこの場から去れ」

ゼロは気を緩めずに言う。返ってきた返答は、軽く裏切られたが、それでも期待は出来る方向だった。

「なら、ゼロから去りなよ」

「それもそうだな。じゃあ、行くとするか」
「待てよ」

「まだ何か有るのか？」
「アンタ、なんであいつの存在が分かったんだ？」

「……幾千、幾万の戦場に赴くとそう言うのもわかるようになる」
「アイツ、完全に殺気を消していたぞ？」

「俺はそんなのもすぐにわかる。そこにいる高貴な騎士なら分かる
だろっ」

「……^{ワタシ}私もそれは感じた。愚弟が鈍いだけだ。気にするな」

「そう言ってくれると助かる。じゃあ、行くぞ」

ゼロは歩き出す。その後駆がギルに言う。

「なあ、姉さん」

「なんだ？」

「やっぱり、クー・フリーンの姿が見えないんだけど」

「……解せぬな。微かに感じるが……」

「やっぱ、ついて行った方が良いかな？」

「勝手にしろ」

「なら、ついて行ってみる」

駆は駆け足でゼロの後をついて行く。

*

「ただいま」

「おかえり……って、さっきよりも疲れてへん？」

「いや……ちよつとな。考えごととしててよ」

ゼロは力のない声でそう言い、その後祐輔と昶を呼ぶ。

「どうかした？ ゼロ？」

「ああ。二人にちよつとやって貰いたい事がある」

「やって貰いたい事？」

昶が聞く。ゼロはそれに返す。

「そう。昶にはアルトリアをだして貰って、で、祐輔には、その他の奴をだして貰う」

「アルトリアを？」

「俺は良いけど…って、まさかさ。アルトリアとギルとアーチャーがいない理由って…」

「やっぱな」

「やっぱなって…予想してたのか？」

ゼロが納得したようにそう言うと、昶が驚き、尋ねる。

「昶が来た時から、全部予想済みだ。大方、祐輔が帰ってきた所にそこにいる4人が重なったんだろ？」

「良く解ったね」

ゼロの鋭すぎる推理で、祐輔は感心する様に言う。

「けれど、どうするの？ 出したところでさ」

「さっき俺が連れてきた奴に見せる」

ゼロはそう言うと、駆を指差す。

「成程。微かにではありますが、英霊が出すそれを感じます」

「祐輔。お前、何者だ？」

「人間だよ？」

「じゃなくて！ なんで、キャスターとライダーとクワがいるかって話だ！」

昶は彼女らを指差して言う。

「説明しなきゃ駄目？」

「駄目に決まってるだろうが！」

「これ、ゼロには聞かれたくないから、後でで良い？」

「聞かれると何か有るのか？」

「ん〜。なるべく、親交が深そうな昶だけに話しておきたいんだよ」
「そうか」

祐輔がそう言つと、昶は了解する。

「それと。英霊じゃないから、メドゥーサとメディアって名前になつてるから、気をつけてね」

「誰のだ？」

「ライダーとキャスターだよ。昶の言うね」

「……わかった」

昶は納得していない表情でそう返すが、祐輔はなるべく気にしない様にしていた。

「さて、準備も済んだみたいだし。呼んでくる」

ゼロは二人の様子を確認し、ゼロは走り去る。その間に、祐輔は昶に話す。

「メディア、メドゥーサも含めて、俺の…元は、兄貴のデバイスなんだ」

「祐輔の？」

「そう。その当の本人も、故郷ごと自分の力で木端微塵になつただけどね」

「じゃあ…」

昶は祐輔の方を向いて、言葉を止める。祐輔はため息をつき、返す。

「そう。ゼロは俺の兄貴代理…って、行ったら人聞き悪いけどさ。」

本当にそうなんだよ。俺の兄貴のクローン。クローンID、アルタード。でも、兄貴は一つだけ願いをかなえてくれた」

「それが、こいつらとの共生？」

「それは少しち違えな。第一、大将はそんなこと…今なら願いそうか」

「そうだね。半分正解。俺は、「皆が無事に帰ってこられるようにしてくれ」ってお願いしたんだよ。皆、怪我なく無事に、欠けることもなく…ってね」

「成程な」

話し終わると、ゼロと隣に男が一緒にやってくる。

「じゃあ、とりあえず、草壁。言う事はないか？」

「いっぱいありすぎて話からねえ。アルトリア、クー・フリーン。何故そつちに居る？」

「やっぱりな。話せば長くなるが、こいつ等はお前の知ってる、ク

ーヤトリアじゃない」

「どっついうことだ？」

「つまり、並行世界に来たって事だよ。解らねえな。お前は…」

ゼロが嘆息する。するとはやてから声がかかる。

「ゼロ」。ちよつと来てもらってええか？」

「了解。ちよつと待ってる！ じゃあ、そう言う事で」

ゼロはそう言うのと走り去ってしまふ。

「本当に、これだけそろつてると大御所ですね。祐輔」

「まあ、確かにね」

メドゥーサがそう言うのと祐輔は頷く。

*

「すまん。待ったか？」

「いや、そんなに待ってへんよ」

ゼロとはやては合流する。

「とりあえず、どうしたんだ？」

「これ見て欲しいんやけど。さっき、リタが調べてくれたんやけど

……」

「……マジなの？ これ」

はやてから端末を受け取り、用心深く見る。すると、驚きの結果が待っていた……。

「へ？」

「パラレルワールド並行世界が……なくなってるぞ……？」

「……じゃあ……」

「もしかしたら、帰れないってことも……」

『……………』

沈黙。そして、はやてはシャウトする。

「なんやてえええええええつー！！」

「バカっ！ 叫ぶなっ！！」

「叫ばずにはおられへんよ！ どうすんのやー！！」

「俺も考えてんだよっ！ 先ず落ちつかねえと話にならねえだろうがっ！！」

「どうしたんだ？ 二人とも」

二人は声を掛けられ、振り返る。そこには、並行世界を一番良く知っているであろう、草薙翔がいた。とても心配している顔をして。

「な、何でもないんだっ！ なっ！ はやて！」

「あ、うん。何でもないんや！ 翔従兄さん！」

「なら良いんだが…」

翔はそれを聞くと、足早に立ち去る。

「とりあえず、この事は俺等で内密にしよう。下手に言つと後が大変だから」

「了解や」

そして、二人は皆がいる場所に戻った。

認めたくないものだな…。若さゆえの誤りというのは…！

ゼロ「さて、ZEROの境界線、リリカ才版です」

はやて「ユウが出てきおったな…」

ゼロ「てか、バレなくてよかったと思うよ。ホントにさ」

はやて「そっちな」

「???」「やつぱ、隠してたんだね？」

ゼロ「隠してねえ。てか、お前、誰だ？」

「???」「ここでは言えない。絆の方で、伏線張るから、その時に」

ゼロ「そうか。じゃあ、次は…。ロメスティック…バオレーンスッ
！」
はやて「家庭内暴力!?!」
ゼロ「つー訳で、東吾さん、お願いします」
はやて「どんな決め方やつ!」
ゼロ「気にしない」

Chapter 8 「大御所だな……」 (後書き)

という訳で、東吾さん、お願いします

Chapter 9 - 異世界での再会（前書き）

どうも、東吾です。

まずはかなり遅れてしましまして、誠に申し訳ありません…。
他作者様方、ならびに読者の皆様方には、ほんとにご迷惑をおかけ
しました。

それでは、久方ぶりとなりましたが、どうぞ！！

Chapter 9 - 異世界での再会

「うむ…」

様々な世界から人々が集ったあの日から、早数日が経過した。あれから特に目立った事件も起きておらず、皆平和な時を過ごしている。

そんな中、それぞれに用意された自室で、翔は一人、ディスプレイを眺めて唸っていた。

キーボードを尋常ならざる速度で打ちながら…。

「翔、入るぞ〜」

そんな折、部屋に入室してきたゼロ。

「ゼロ、どうした？」

「いや、差し入れにコーヒーを持ってきたんだが…」

「そっか、サンキユな」

そう言いつつコーヒーを受け取るも、キーの操作が緩まる事はなく、翔の前には多数の画面が展開されていく。

「まだ調べてるのか？」

「ああ…。どうしても気になってな…」

あの日見つけた6つの魔力反応。

それに心当たりのあった翔は、一人反応のあった地点へと急行するも、そこには誰もいなかった。

反応対象や、ガジェット、シャドウすら…。

「…。ま、言って聞くような奴じゃないってのはわかってるが…無理はすんなよ?」

それだけ言い残すと、ゼロは部屋を後にした。

「…」

残された翔は、映し出された画面を眺めたまま、キー操作を止める。

(無事でいてくれればいいが…)

そう心の中で呟いた矢先だった…。

「っ!! 敵襲!?!」

ここしばらくごく無沙汰だったアラートが鳴り響き、彼は椅子から立ち上がる。

『翔、いる?』

『フェイトか?』

『今、市街地に敵襲があつて…』

『皆は、もう向かったのか?』

『うん、街に向かった皆は、既に討伐へ向かってくれたわ』

『わかった。俺も至急向かうよ』

それだけ言い残して通信を切ると、翔は部屋を飛び出し、市街地へと向かった。

「すまない、遅れた」

「遅いよ、翔君」

「もう俺らで片付けちゃったよ」

「すまない、レン、駆」

首をコキコキと鳴らし、柔軟運動をしているレン・クロフィールと草壁駆を前に、翔は素直に謝辞を述べる。

到着はしたものの、既に状況は終了した後であった。

「ちなみに、いたのはガジェットとシャドウの混成部隊」

「まったく。一体どうなつてんだよ、この世界は…」

「とにかく、片付いた事だし皆の所へ…」

戻ろう…、そうレンが言いかけた時、はやてからの通信が割り込んでくる。

『三人とも、また敵の反応が出たんでそのまま現場へ向かってもらつてええかな?』

「場所は?」

『そこから北・東・南西の3か所に分岐わかれとる』

「3か所…。人数もちょうど3人…」

「畏…かな?」

「そう考えるのが妥当ですね」

「だが…まあ何とかなるだろ」

『今、皆にも向かって貰つてるから』

「了解」

通信を切ると、駆は北へ、レンは南西へ。既に2人は動き出していた。

「…って、早えよお前ら!」

それに遅れる事数秒、翔もまた、東へと進路を取り、移動を開始した。

東へと移動中、翔の下に祐輔からの通信が舞い込む。

「っ！！ ツインブースト！！」

その内容を聞き、速度を速める翔。
通信の内容は…

探していた名無しの魔力反応が6つ、君の向かっている東方面に現れた。

どうするかは、君に一任する。

というものだった。

「あれは…ガジェット…？」

反応があったとされる地点へと到着すると、そこにはガジェットが数機、辺りを徘徊している。
何かを探しているとみて間違いなかった。

「とりあえず、いると後々面倒だな…」

デバイスを構え、射撃を一発撃ち込む。
が、途中でそれは霧散する。

「AMF、か…」

気翼を展開し、接近戦を試みるべく距離を詰める。

「っ!？」

が、今度は自身を包む騎士甲冑が霧散し、私服姿に戻ってしまう。

「ちいつ、A - A M Fだったのかよっ!！」

展開された翼は、魔力ではないのでその対象からは外れる為、落下する事は避けられた。

そんな彼に気付かないはずもなく、ガジェットらは一斉にそちらへと突撃をかける。

翔は掌に気を集束させ、向かい来るガジェットに撃ち込み、応戦。A M F下での戦いに慣れている為、制圧するには時間はかからなかった。

「…。とりあえず片付いたが…」

翔は自身の姿を確認する。

相変わらず、騎士甲冑は元には戻らない。

どうやらまだ、A - A M F機能を搭載している敵がいるらしい。

周囲の警戒を続けながら、辺りの搜索を続行した。

「…。また、空振りなのか？」

搜索を続ける事数時間。

魔力反応の痕跡は依然見当たらない。

そんな時だった。

「ふう、ようやく治まったようだな…」

「だねえ」

「まったく、何なのよ……」

「私達の知ってるミッドじゃないみたいだったのは、なんとなくわかるけど……」

近くの建物から人影らしき物が見えると同時、それらは現れた。

「どう、お姉ちゃん？」

「ダメ。まだ魔法は使えそうにないわね……」

そんな6人を、翔はただ呆然と見つめる事しかできないでいた。予想が当たっていたとはいえ、まさか本当に彼らが来ていようとは思ってもみなかったから。

「っ！！ まだ残っていたのかよ！！」

『っ！！』

そんな驚愕で動けない翔の目を覚まさせたのは、不幸にも、残っていた敵による、彼らへの奇襲だった。

地面から現れたガジェット・シャドウの混成部隊に動揺する彼ら。

「焰冷槍！！」

『っ！？』

彼らの目の前を、赤き砲撃が横切る。

砲撃の難を逃れた敵群が、彼らへその牙を向ける。
だが……

「……させると思ってるのか？」

瞬転行使により放たれた神速の抜刀術。
その一閃により、シャドウは上下に分断される。

「あ、ああ……」

彼らを庇う形で前に立ち、その声をかける。

その姿に、彼らは言葉を失う。

「皆、大丈夫か？」

「嘘でしょ……？」

彼を間の辺りにして、そう呟く。

「嘘なワケないだろ。それとも、幼馴染みの顔を忘れる程、お前は薄情だったのか？」

「そ……そんな訳ないっ……！」

「なら、今お前らの目の前にいる草薙翔は、紛れもない現実だ」

そう言って、翔は二カツと笑う。

「奈月、百合華ちゃん、美雪さん、希望、クリス、理奈。皆そのま
ま動かないでくれよ？」

律儀にも動かずにいてくれた敵群を見据えたまま、翔は幼馴染みら
に待機するよう告げる。

「さあ……大掃除の続きといきますか……！」

その手に生み出された赤い気弾を放つ。

再会の喜びを告げる祝砲と、再戦を告げる狼煙の両方の意味を込め

て
:
。

Chapter・9・異世界での再会（後書き）

さて、次のランナーは…

godaccceiさんにお願いしようと思います
ではでは

Chapter・10・混乱と混濁（前書き）

更新されてるのに気が付きませんでした……orz
ということ、二時間程度で完成させたものを……
圧縮しすぎたかなと思いますが、大丈夫だと思います。

それでは、皆さん楽しんでいってくださいね

Chapter・10 - 混乱と混濁

「さあ、シヨ一の始まりだ。もがき苦しめ、混濁した世界で大切なものを護り通せるか？」

*

「ふう、一応殲滅つと」

レン・クロフィールは相棒、シャドウ・ライトを担いで体を解す。その目の前にはバラバラに砕けたガジェットが山のように積み上げられていた。

「それにしてもまさか消えるなんて……」

《そうですね、私にも何が何だか……》

フィールの驚き声にシャドウが反応する。

そう、今ここにあるのはバラバラに成り果てたガジェットの数々だが、フィールが仕留めたのはガジェットだけではない。

黒い生物のようなものも含まれていたのだ。

だがそれらはレンに倒された後、まるで溶けるように消えていったのだ。

「ここは済みましたし、どこかに援護でも行きましようか」

《そうで……マスター！ 敵です！》

反射的に身を屈めたレンの頭上を巨大な砲撃が通り過ぎる！

推定ランクはS。明らかに強いと称えられるレベルだ。

だが今はそんな事を議論している暇はない、フィールは砲撃が飛んできた方向に目を向ける！

そこにいたのは少女。ただし資格好だけでその身から発せられる気配は、それだけで人を圧倒する重さがあった。

手に持つ銃剣から硝煙が上がっているので、さっきの砲撃がその少女によるものだと一目でフィールに気づかせた。

「避けられるとは思ったけど、まさか無傷だなんてね　ますます楽しみだよ　」

《イユ、遊び過ぎるなよ？》

「分かってるよ　ちよつとだけ運動です　」

イユが銃口をフィールに向ける！

「ナメてくれますね……子供に負ける訳にはいかないじゃないですか」

《油断は禁物ですよ》

分かってます、とフィールは返し、シャドウを振り上げた！

轟っ！　砲撃が放たれる！

同時にフィールの姿は消え、イユの後ろに現れる！　予め上げていたシャドウを渾身の力で振り下ろした！

その一撃必殺級の不意打ちに対し、僅かに焦ったように銃剣で防御するイユだが、対処の遅れからか力負け、吹き飛ばす！

《イユ！　横だ！》

「っ！」

「遅いですよ！」

追い討ちをかけるために転移したフィール、追い討ちを考えられなかったイク。

結果は明らかだった。

シャドウがイクの華奢な体に叩きつけられ、地面を揺らす！

「……偽物、ですか」

「当たり前　どう？　まあまあが出来だったでしょ？」

地面でくの字に折れ曲がったイクが黒く変色し、溶けるように消える。

まるでさっきまでの黒い物体のように。

「それはシャドウ・レプリカ、とある並行世界に実在する存在を劣化複写したもの何だけど、使い勝手がいいから重宝してるんだ」

楽しそうに話すイクだが、それは隙だ。

フィールが転移で距離を詰め、一気に叩こうとした所で気付いた。

魔法が……発動しない！？

正確には魔力が結合するのを阻害されているだけだが、そんな事はどうでもいい。

転移が使えないというのはフィールにとってのアドヴァンテージを一つ取られたようなもの、若干の焦りが見える。

「純粋な剣技での勝負という事ですか……」

「ザッツライト　でも安心して、仲間が近くに来てるよ」

「……気付いてたのか」

木の影から姿を表したのは騎士王だった。

悪魔は笑う。着々と進む計画の完成に。
騎士は動くだけだ、世界に害為す敵を葬るために。

*

「なんつった、もう一回言ってみろ！」
「俺はロリコンだ　　そしてお前達の敵だ」

話は少し遡る。

翔が敵を始末するために市街地に駆け出した後、なのはの所にヴィヴィオが来たのが発端だった。

「ママー！」
「ヴィヴィオ？　どうしたの？」

なのはがしゃがんでヴィヴィオと同じ目線で話し始めた頃、ゼロと流留はその姿を微笑ましく眺めていた。
そして

「実はな、俺小さい子供大好きなんだ……」
「急に何言い出すんだよ……ヴィヴィオをそんな目で見たら仲間だとしても全力全開でお話するぞ？」

ゼロが諦めたような口調で釘を刺すが、それも何のその、流留がさらに続ける。

「……気にするな、俺は仲間出はない。どちらかと言えば敵だ」
「っ！　おまっ　　！」

《閉鎖しろ》

バキツと何かが固まるような音がした。
直後、中央にいたフェイトが悲鳴を上げた！
直ぐに近付きフェイトに触れるゼロ、そこで、フェイトの体が動かない事を知った。

「さあ、始めよう、楽しいショーを」

「フェイトに何をしたああ！！」

「動けないようにし、この時間平面を固定する杭にした、動かせばここから出られるが……」

まるで嘲笑うように口の端を吊り上げ、

「……殺す程度で打たねば動かないからな？」

「……なんつった、もう一回言ってみる！！」

ゼロのキレた声でヴィヴィオは震えなのはにしがみつき、なのははレイジングハートを起動させて流留を睨みつける。

流留は、長短一対の紅槍を両手に出し、

「俺はロリコンだ　　そしてお前達の敵だ」

ドゴツ！　と何かが壁に打ちつけられた！

壁は壊れないが、その分の威力さえその何かに伝わる。

動いたのはゼロ、打ちつけたのは流留の頭、その状態で、いつ頭を潰されてもおかしくない状態で流留は更に笑う。

「趣向を凝らすぞ」

「喋んじゃねえ！」

ゼロの拳が完全に流留の頭を貫いた。

そう、文字通り頭を貫通させた。

「こういうゲームだ。今からここに水を溜める、水は外に出ないから溜まり続ける。早く勝負を決めるよ？ 息が出来なくなる程度なら助かるが、一杯になっても溜まり続ける水からの圧力は、臓器を潰すからな」

ゼロの後ろに流留がいた。

頭は正常だ、風穴も空いていない。

「イツツシヨータイム」

道化が笑う。

誰もかれもが笑えないゲームの始まりを告げて。

*

「ここにもーっ」

シルヴィは空間に手を差し込み、しばらく後に引き抜く。

そしてゆっくりと伸びる。

「ん……… これで完了かな？ 全方位に設置も出来たし、そろそろガジェットを引き替えさせないと」

考えれば実行に、何か不穏な空気を感じ徘徊させていたガジエツトを回収するべく戻ったのだが、そこにあるのは壊されたガジエツトの山。

シルヴィはしばらくそれを見た後、近くに魔力反応を2つ察知する。

一つは単体だが、もう一つは集合としての一つだ。迷いに迷って集合の方に向かった。

そこにいたのは六人の人間、魔法を使えなそうな人間も混じっている。

その全員がガジェットと戦っているもう一つの反応を目で追っていた。

「すみません、道を聞きたいのですが？」

「え？ あ、ええっと……どちらへ？」

律儀に返してくれた事を喜びながら、適当に場所を言う。それから目的である事を聞く。

「彼凄いですね、名前は何て言うんですか？」

「翔、草薙翔です」

「草薙……翔……さんですか、覚えておきます。では私はこれで失礼しますね」

身を翻す。

草薙、翔……。彼は強いですね、利用させて貰いますよ

シルヴィは歩く。

歩いて、突如現れた空間の裂け目の中にそのまま歩いていった。空間が閉じるとそこには静けさだけが残されたのだった。

Following World

流留「作者は混乱させるのが好きなのか!？」

イユ「ホント、一体何がしたいんだろうね？」

いや、ほらね。

戦いありつてあるなら敵欲しいじゃん？

だからさーいっそのこと自分のキャラを全員敵にしようかなーなんてね……ごめんなさい、やりすぎました。

流留「馬鹿!」

イユ「馬鹿!」

グフツ！ パタツ……

流留「まったく、次に書く作者の事を考えろよ!」

イユ「つで、誰に回すの?」

流留「そうだ、誰に回すんだ!？」

う、うーん……

じゃあ二階堂さんをお願いしますしようと思います

流留「さてさて、このめっちゃくちゃな文章を理解してくれたのか…」

ぐ……いや、きつと……大丈夫……だと思っ……思いたい！

流留「弱気だな」

イユ「じゃあこの辺で終わろっか」

またねー

Chapter 10 - 混乱と混濁（後書き）

と言っわけで毎回混乱させている回の後で申し訳ないですが
二階堂さん、よろしくおねがいます

Chapter・11 - 賢沢は皆の敵 - (前書き)

代打↪代打↪ ZERO×ZERO

空振りっすね。それではどいづと

Chapter 11 - 警沢は皆の敵 -

(祐輔、聞こえてるか?)

(んあ…。ゼロ? どうしたの? こんな休みの昼間っから)

気だるそうに起き上がり、時計を見る。着替えるのは面倒なので、そのまま念話で受け答える。

(とりあえず、現状時点で凄くヤバいから援軍頼むわ)

(めんどくさい)

(警沢すんなよ。昨日仕事が入って疲れてんのは一緒だろ)

(そうだけどさ。ったく、なんで俺がこんなこと…)

そんな悪態をたれながらも、しつかりと準備は整っている。PCを開いて、さらに、ヘッドマイクをつける。眠気も3500兆の桁の暗号を解読している内に覚めるだろう程度に、作業をしている。

(で、どうすればいいの?)

(暗号解読。結界のデータ送るから、さっさと解読しろ)

(了解。面倒で嫌だけど、警沢できないしね)

(さっさとやれ。やっと剥がれた結界なんだ。それに、水位もかなあゝり拙いから、持って5分だな)

(はいはい。やればいいんでしょ、やれば)

祐輔はそう言っつて、送られてきた暗号を見る。数字、漢字、ロシア語、古代インドの象形文字。それらがすべて合わさった様な暗号。それを見るだけで、ざっと5000桁。それを見た祐輔は欠伸を一つして、キーボードを高速でたたき込み始める。バラバラな文字を一つにまとめてそこから導き出される法則を読み出し、解読数式を

入れて、パスワードを入れる。そして、結界に直接パスワードを入れて、ENTERキーを押す。「complete」の表記が現れ、それと同時に扉が開く。

「祐輔、朝食どうします？」

そこから出てきたのは、いかにも家庭的なトリア。いつもの甲冑ではなく、私服で部屋に入ってきた。Ｔシャツと、それに合わせ、ロングスカートらしきものを履いている。祐輔曰く、これは結構オツなものがある、らしい。

「…じゃあ行く」

そう言い、PCを持って席を立つ。やろうと思えば、端末でもできるのだが、買うお金がもつたいない。とのことだ。給料は月3割ほどしか使っていないのは、確実な余談。

廊下を歩いて行く途中に、暗号が追加されていたが、それも難なく解消。その後、一本のメール。中身は、暗号だった。「また暗号…」祐輔はそう呟き、解読を始める。

途中まで解読を終えた時、手が止まった。風の音が消えている。さらには、何の気配もしないような感じ。ゆっくりと歩いていき、外に出る。本当に誰もいない。

パスワードを入力すると、もれなく無料で砲撃が付いてきますなんて、凄いいことになりはしないよね、これ。と考えつつ、剣を出して、腰に差し、パスワードを入力する。

「バーン」

「すっごい予想通りだね」

そう言いつつ、ちゃっかりかわす祐輔も祐輔だ。かわいい声とは裏

腹に、地を抉る砲撃が祐輔に放たれた。祐輔は超苦笑いで見上げる。自分の身長以上に長く、大きく。自分の体重以上に重そうな銃剣を持っている少女、イユが。笑顔でそこに立っていた。

「全く。家、どうしてくれんのさ」

「え？」

「いや、え？　じゃなくてさ…」

さっそく惚けられたものだから、手を横に振り、自分の家^{だつたもの}を指差す。トリアは、デバイスの方に移動させておいたので被害は全くないが、祐輔はそれどころじゃない。一応、機動六課に設けられた寮だったのだから、此処をぶっ壊されると、自分の立場が危うくなるということかなんというか。

「でも、祐輔君、平気じゃん」

「そついう意味じゃないでしょ！」

ぶっちゃけた発言に少しキレた祐輔は、跳躍し、イユに一気に近づく。イユは、銃剣をふるってカマイタチを起こし、祐輔に攻撃をする。

「邪魔くさい」

掌に風をため込み、放出することでカマイタチを完全に無効化する。足場を作り、そこに着地。それを見計らって、イユはトリガーを引

く。祐輔は、弾丸に向かって跳躍。弾丸と重なるように体を置き、剣で中心を貫く。弾丸が4つに分散し、その割れ目から祐輔が出てくる。予想外だったのか、さもおかしげに笑う。イユは銃剣で防が、祐輔は剣に炎を纏わせて、剣道で言う逆胴の形で、銃剣を弾き、タックルで思いっきり地面にたたきつける！

「ともかく！ 弁償してもらおうか！ 俺……の……い……え……」

少し、煙で辺りが見えなかったのと、頭に血が上っていたので、よく見えなかったが、イユの胸を思いつき触ってしまうというところでもないハプニングに見舞われたようだ。いや、沢てしまうというより驚掴み。誰かに見られたらどうなる…？ と考えると、冷や汗が全身にぶわああと滲んできた。まだ気づいていないうちに逃げるのが得策だとは思うが、体が完全に硬直して動かないようだった。そして、イユが目を見開いて、さも面白そうに笑う。

「へえ…。祐輔君って意外と大胆なんだねえ…」

「いや、これはその…！」

「いいよ？ 私、そういう強引なの、結構好きだよ？」

「どうリアクションしていいのかよくわかんないや…」

祐輔はそう言うのと手を離して、思いつき後ずさる。イユは、それを追いかける。祐輔はいったん落ち着き、右手に火弾を作る。そうだよ、よく考えてみれば、意識失わせて放置でいいんだよ。なにも俺が焦る必要なんてどこにもないじゃん…。と、3回ほど言い聞かせ、大きく息を吐く。体の緊張を全て解くために。ゆっくりと剣を構え、イユを見据える。

「やる気かな？」

「まさか」

祐輔の作戦はこうだ。まず、イユをいい感じに牽制。弾幕と煙幕を張る。

次に、結界を剥ぎ取り、暗号を解読。分解を開始。ここでも弾幕と煙幕は忘れない。

最後に、結界を破る。これで向こうは騒ぎを起こせない。と言ったわけだが、この作戦には色々と問題が伴うため、それ相応に注意が必要なのだが。

「作戦開始…かな」

そう言うと、火弾を連続で放つ。イユはそれを銃剣の銃弾で撃ち落とし、煙幕が張られる。第壹段階クリア…。祐輔はそう思い、持っている剣で思いつきり結界を切り裂く。ただ、結界なので、剥がれる程度にしか取れないのが現実。祐輔は一部分を剥ぎ取り、牽制を開始。暗号として現れたのは、数式だけの単純な暗号。だが…。

「…最後の文字が切れてる…？」

「くふっ」

煙幕を破って特攻をかけてくるイユ。表情は笑顔。銃剣の切っ先は、祐輔の顔面に向いていた…。

*

「留流。一つ問おう」

*

「ほらほら、もっと速く動かないと、撃ち殺しちゃうよ」
「く…」

楽しそうに攻撃をし続けるイユ。それを切りながらかわす祐輔。状況は防戦一方。左目がつぶれているのだ、それはしょうがないと思える。だが、今考えるのはこの危機的な状況をどうするか。左目は見えない。さらには、結界も破る手は失せているこの状況。どう打開する…？ 作戦変更はできるにはできるけど、トリア達に迷惑はかけられない…。どうする…？どうする…？ そんな事しか、頭の中を回っていない。デバイスは活動停止状態になっている。使えるのは、Eyes attributeと呼ばれた力だけ。だけれど、これは小さい頃に右目だけで発動して暴走したトラウマがあるため使えない。考えを巡らせている内に、砲弾の一発が祐輔の頬を掠める。

「ごんごん遅くなってくね。あれ、使いなよ。私なら死なないし」

多分、これは誘い。ここで乗ったら、確実に迎撃というレベルじゃないほどのレベルの砲撃が自分に襲いかかるだろう。昔を思い出す祐輔。あれは…小3の頃だったかな？ いや、もっと後、中3(？)だとは思う。確か、殴られたときに左目怪我して、それでキレて風の奴使ったら竜が出てきて辺り一面吹き飛ばして、その年は、逮捕されたんだっけ…。それでついた仇名が、風の死神…。祐輔は、大きくため息を吐いて、剣を地面に刺す。

「言っとくけど、後悔したって知らないんだからな」

そう前置きして、半ばヤケクソになっていた祐輔は、トラウマってなんでしたっけ？ 的な感じのノリで発動した。魔法の世界だから許される、その力を。発動した。

「来い。焰」

その言葉に、周りの温度が一気に下がり、イユの四肢がわずかに凍りつく。祐輔の後ろには、紅蓮の竜が立ち昇り、渦巻く。イユはこれでも笑ったままの表情は崩さなかった。イユは、この状況になるのをひそかに狙っていたのだ。やけくそになるまで鬼畜な位置に砲撃をして、そして、これが出た瞬間に落とすという作戦だったのだ。

「ふふ」

「なにがおかしいのさ」

「…これで条件はそろったよ。イレギュラーさん」

条件：？ 祐輔は何のことかわからずに一瞬止まるが、自分には関係のない事、そう確信して、竜を放つ。竜は大きく口を開き、イユを丸呑みにする。そのまま地面にぶつかり、消えていった。当たった地面は溶けて、辺りから硝煙がところなしと出ている。やったか…。そう思いホツとした時。斬撃音。祐輔の体が若干の浮遊感に襲われる。そして、だんだんと視界が白く染まっていく…。ゆっくりと後ろを振り向くと、呑まれたはずのイユがそこにいた。祐輔は自分の胸を確認すると、銃剣の先が出ていた。つまりは、貫かれたのだ。

「さあ、BADENDだよ」

そう言うと、引き金がゆっくりと引かれ、祐輔はボロ雑巾のように吹き飛ばされて地面を転がった後、うつ伏せに近い形で静止した。

イユはゆっくりと近づき、祐輔の右目を抉り取る。抉り取ったそれは、目玉としてそこにあつたものが虹色の寶石に変わった。内側からはじけるように。それでも、祐輔に瞳が戻るわけではない。それを知っているうえで、祐輔に銃弾を一つ置いていく。

「じゃあね。もう片方は、盲目の剣士を名乗れるようになったらにするよ」

そう言い、建物類をすべて元に戻してから、結界を解除。その場から立ち去った。そこに残つたのは、ほぼ死体と化している祐輔だけだった…。

*

「さて、こんなもんだろ」

ゼロはそう言うと、ほぼ真っ白な状態のデュノアを見て言う。何をやったかというのはご想像にお任せするがこの状況で、フェイト達が怯えてガクガクブルブル…と、そんな状態にはなっている。ゼロはそんな状態のデュノアを引きずりつつ、なのは達の方に目をやる。少しびっくりさせ過ぎちまったかな…。自身でも少し反省点がある。ゼロはそのままにしておき、デュノアを連れて行こうとした時、遠くで殺気を感じ、一瞬足を止める。

「今のは…」

その呟きが聞こえたのか、フェイト達がゼロの方を向く。当の本人は固まったまま動かずに、殺気を感じた遙か遠方を見つめている。風が髪を揺らし、ゼロは何かに気づいたようで、ブレイブフォースを通じて、祐輔に通信を入れ始める。なんで出ないんだよ…。おか

しいだろ…。ゼロはもの凄い剣幕でその気付いたところに目を向ける。その方向には祐輔の家がある。要するに、襲撃に遭った可能性がないとは言い切れないのだ。5コールほどしたところで、連絡先を管理局の三提督のほうに変えた。

「…久方ぶりだな。八神元帥だ」

「久しぶりですねえ。どうしました？」

「今すぐ頼みたい事がある等にある」

「まあ、落ち着きなさい。そんな事では、動こうにも動けませんよ？」

「…そう、ですね」

ゼロは途中で区切りつつ、敬語に直す。頭の中をまずすっきりさせるゼロ。そもそも、殺されたというのは俺の中の仮定にすぎない。大丈夫だ…。アイツは無事だ。俺の親友が死ぬなんて自体があつてたまるかよ…。ゼロは自己暗示気味の言葉で、心を落ち着かせ、話し始める。

「失礼。実はちよつとした事件がありました」

「内容は聞きません。私たちに何をしてほしいのですか？」

「管理局で他に奪われたロストロギアがあるかの確認と警備の補強。それと、ロストデバイスの使用許可。それを下さい」

そう告げる。これからは、戦いの余興となる…。

祐輔「結局俺はどうなるの!？」

ゼロ「ロストデバイスって、まだ非公開だよな!？」

麗「まあまあ。落ち着きなはれ。この奴で死人は出さないから…多分」

ゼロ「多分ってなんだ！？多分って！」

麗「それよりも、カメラ回ってる」

祐輔「マジで!？」

ゼロ「ZEROの境界線」

祐輔「無理矢理すぎだよ!？」

麗「気にはしていない」

ゼロ「その通りだ。前回、二階堂さんに振った訳だが、ちょっと無理そうだったらしいから、無理矢理な方向性でこっちをやったらしい」

麗「ちょっと違うが、まあ、そのような感じですよ」

祐輔「さらにぐっちゃんにしてない?」

麗「断然、無視の方向性で」

ゼロ「祐「いやいやいやいや!」」

麗「と言う訳で、二階堂さんに再びスローイン」

Chapter・11・贅沢は皆の敵・（後書き）

という訳で、二階堂さん、宜しくです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0276k/>

Lyrical chaos the world ~ 世界を越えた決戦 ~

2010年11月16日10時46分発行